999

大藏省

1298

~~1279~~

早稲田図書

A 999

日本ノ財政及経済ノ現状ニ付テ

日本ノ財政及経済ノ現状ニ関シテハ概シテ其ノ好良ナルモノニアラサルコトヲ思惟セラルヽニ似タリ是レ独リ日本国内ニ於テ往々然カク考ヘラルヽノミナラス倫敦ニ於テモ間々此ノ如キ見解ヲ抱キ日本ノ財政及経済ノ前途ニ付キ不安ノ念ヲ起スモノナキニシモアラサルカ如シ蓋シ近キモノハ大ナリト見ヘ遠キモノハ小ナリト見ユ目前ノ個事故ハ屢々

大正十一年四月
大隈信常卿寄贈

甚タ重大ナル事件ナルカ如クニ思ハルヽコトアリ目下日本ノ財政ニ於テ多少ノ困難ノ存セサルニアラス又其ノ経済ニ於テモ若干ノ障害ナキニシモアラス然レ𪜈此ノ目前ノ多少ノ困難若干ノ障害ヲ見テ直ニ日本ノ財政及経済ノ前途ニ対シ不安ノ念ヲ起スカ如キコトアラハ豈ニ其目前ニアルカ為メニ左程ニ重大ナラサル事項ヲ甚シク重要且大視シタルモノニアラサルコトナキヲ得ンヤ余輩ハ敢テ日本ノ財政及経済ノ前途ヲ弁護シテ日本ヲ其ノ真価ニ値スルヨリモ以上ノ価格ヲ以テ引上ケンコトヲ試ムルモノニアラス然レ𪜈日本ノ財政及経済ノ真相ヲ明白ニスルコトハ極東カ関係ヨリ英国ト愈々密接ナル関係ヲ有シ来レル今日ニアリテハ相互国民ノ間ニ利益アルコトナルヘシト信スルモノナリ

目前ノ事件ニ對シテ正當ナル着察ヲ為サントスルニハ大勢ノ上ヨリ之カ達觀ヲ為サヽル可カラス故ニ余輩ハ日本現時ノ財政及経済ノ困難ト称セラルヽモノヽ着察ヲ為スニ當リテ先ツ日本ノ経済財政ハ如何ナル経過ヲ為シツヽアルモノナルカヲ見ル可カラス

日本農商務省カ本年八月公ニセル統計表ニヨレハ其ニ左ノ如キモノアリ

	自明治十九年至同二十三年平均生産高	明治三十九年生産高
生糸	四、九七五、八三九斤	九、〇一七、〇〇〇斤
茶	四三、七四九、一八八斤	五三、一二七、四五六斤
絹織物	三、三六一、〇三〇反	九、八九七、七五六反
綿交織物	三、六五一、一一四反	四、三八三、〇四七反
木綿織物	二七、四二五、五九五反	七〇、二〇五、五九三反
麻織物	一、一四七、九八六反	一、五七一、二五五反

是ノ如キハ日本ノ生産力ノ非常ナル発達ヲ為シツヽアルヲ示スモノニシテ外ニ又綿糸紡績ニツキテ見ルモ明治二十一年

ニ於ケル錘数一二三、八五六本綿糸産額一、八〇七、〇六六
貫ハ明治二十九年ニ至リテハ既ニ錘数六九二、三八四本綿糸
産額二四、八〇三、六一八貫ニ増加セルヲ見ル加之明治十九年
ニ於ケル船舶鉄道工場及製塩用ニ供（消費）セラレタル石炭ノ
額八五七、八〇〇噸ナリシモ明治廿八年ニ於テ二、六六七、九五三
噸ニ上レルヲ見テモ如何ニ日本ノ製造業及運搬業カ長

足ノ進歩ヲ為シツヽアルカヲ証スルニ足ル更ニ明治二十一年ニ於テ
本邦貿易品ハ輸出六五、七五五、五一一円輸入六五、四五五、二三四円
合計一三一、一六〇、七四四円ナリシモノ昨三十年ニハ輸出一六三、一
三五、〇七七円輸入二一九、三〇〇、七七二円合計三八二、四三五、八四九円
トナリ又明治二十九年税法改正前日本ハ毫モ其税法ヲ
動カサリシニ関ラス且ツ其租税中三千九百万円ノ収入ア
ル地租カ定額税ナルニ関ラス二十一年度ニ於テ七四、二一五、八

〇四円ノ経常歳入ノ自然ノ増加ニヨリ税法改正前年即チ二十八年度ニ於テハ九五、三四四七八円トナレルヲ見、特ニ逋脱多キ所得税ノ昨三十年度徴収ノ現計二、〇九三、五一六円ニシテ十年前（二十一年度）ニ於テ一、〇五二、九八一円ナリシニ比較スルトキハ銀価下落ニヨル経済ノ変動ヲ見積ルモ日本ノ経済及其ノ上ニ根拠ヲ有スル財政ハ非常ナル進歩ノ大勢ノ上ニアリテ

其国民ノ富ハ着ニ確実ナル発達ヲ為シツヽアルモノナルコトヲ疑フヲ得ス大勢斯ノ如シ目下ノ困難ハ如何余輩ハ財政ノ上ヨリ又経済ノ上ヨリ事実ニ付キ之カ研究ヲ為サント欲ス

現今日本ニ於テ財政カ困難ノ状況ニアリト言フハ何モノハ概言スルトキハ内地ニ於ケル公債募集ノ困難及歳入ノ不足之ノ二点ニ過キス

公債カ目下内地ニ於テ募集スルコトノ困難ナルハ事実ナルニ相違ナシ然レ共是レ現今ノ内地ノ金融緊縮ニ基因スルモノニシテ政府ノ財政カ国民ノ信用ヲ失セルカ為ニアラス殊ニ此公債タルヤ歳入ノ不足ヲ補塡セシカ為メニ募集サルヽモノニハアラスシテ明治二十九年ニ於テ決定セラレタル事業公債及明治二十五年ニ於テ決定セラレタル鉄道公債ニ属スルモノナリ其決定セラレタル公債総額ハ二二〇、四七二、〇〇〇円ニシテ其費途ハ

鉄道建設費	六八、〇二五、〇四四円
製鉄所創立費	三、五一六、〇三一
鉄道改良及電話拡張費	五九、三五八、四七五
[illegible]	一二、二一三、五五〇
海陸軍拡張費	七七、四五八、九〇六

ニシテ其既ニ募集シ終リタルモノ五六、八〇七、三五〇円アルカ故ニ差引募集残額ハ一六三、六六四、六五六円ハ事業ノ進行ニ

従ヒテ漸次明治三十七年度マテニ最早部分ヲ除クノ外募集
セルヘキモノナリ今此ノ公債ノ要途ヲ見ルニ何レモ臨時費
用ニ属スルモノニシテ之カ財源ヲ公債ニ求メタルハ其当ヲ得
タルモノト謂ハサルヘカラス而シテ此等新公債ヲ募集スル
ト同時ニ日本政府ハ其ノ公債条例ノ定ムル所ノ償還
年限内ニ於テ償還ヲ為シ得ヘキ財源ヲ特ニ確定シ

其ノ歳入ヲ以テ毎年ニ三千万円乃至四千万円ヲ元利償還
ニ向ヒテ支出セリ従来日本政府ハ其財政ノ困難ナリ
シ時ト雖モ未タ其ノ公債ニ関シテ違約シタルコトナ
キヲ以テ其計画ヲ信用スルトキハ今後四十年ナラスシ
テ凡テノ新旧公債ハ償還シ終ルヘキナリ而シテ毎年
三千万円乃至四千万円ヲ国債ノ元利償還ニ充ツルコト
ハ日本ノ財政事情ニ於テ必スシモ困難ナルコトニアラサルハ

是ヨリ先幣制改正前尚銀貨本位ニシテ銀ヲ金ニ對シテ二十前後ノ割合ノ價アリタル當時ニアリテ年ニ二千万円ノ國債費ニ充テ得タリシヲ以テ見ルモ明白ナルコトニシテ若シ歳入ノ不足ト稱スルモノニシテ次ニ説明スルカ如ク單ニ一時ノ困難ニ過キサルモノトスレハ日本カ内地ニ於テ公債募集ニ困難スルトイフハ其經濟上ノ状況ヨリ來ル一時ノ現象ニシテ之カ為メニ深キ根據アル財政上ノ困難ナリトハ云フヘカラサルナリ加之今日清國ヨリ受取リタル償金ハ尚多ク日本政府ノ手中ニ存スレハ政府ハ公債ヲ募集シ得サル為メ差當リ困難シツヽアルニアラス

次ニ所謂歳入ノ不足ナルモノニ付キテ見ルニ其不足ト稱スルモノカ次年度ニ於テ幾何ナルカハ其豫算ノ未タ編制セラレサル今日ニ於テ知ルニ由ナシト雖モ昨年ノ暮ニ於テ

松方内閣ニ至リテ議會ニ提出セラレ其解散ノ為メ不成立トナリタル三十一年度議案並ニ増税法案及今年五月ノ議會ニ否決セラレタル當時ノ大蔵大臣井上伯増税法案ニ至リテ見ルニ日本政府ノ財政ニ於テ國家ノ進歩ニ伴フ必要費用ヲ現在ノママノ歳入ヲ以テ支弁セントスルモ三千万円乃至三千五百万円不足スル實況アルハ蔽フヘカラサル事實ナリ歳入ノ不足トイフコトハ財政上ノ一ノ困難タルコト疑ヲ容レスト雖モ其ノ歳入ノ不足トイフモノカ果シテ如何ナル性質ヲ有スルモノナルカヲ研究スルトキハ日本ノ財政ノ困難ハ決シテ永久的ノ深キ根拠ヲ有スルモノニアラスシテ全ク一時ノモノニ過キサルコトヲ見ルヲ得ルナリ

抑モ明治二十九年度ノ初頭ニ臨ミテ當時ノ大蔵大臣

タリシ。一渡邊子爵ガ所謂戦後ノ経営ナルモノニヨリテ財政
ノ経運ハ之ニ至リテ海陸軍ノ擴張費其他臨時
ノ事業費ハ其ノ財源ヲ償金及公債ニ求メタリシト雖
モ此ノ海陸軍擴張及設施ノ経営ニ伴フ固ヨリ常経
費ノ増加ハ之ヲ経常ノ歳入ニ求メントシテ酒税ノ率
ヲ高メ登録税営業税及葉煙草専賣ヲ創設

シ之ニヨリテ得ル所ノ収入合計三三、九六〇、七〇九円ノ内ヨリ営
業税ナル諸税ノ廃止ニヨル減額七、五五二、三九七円ヲ扣除シタ
ル残額二六、四〇八、三五二円ヲ以テ之ニ充ツルノ経運ヲ為シ
其ノ結果ハ明治二十八年度ニ於テ九五、四四四、一六七円ナリシ経
常歳入ハ明治三十年度ニ於テ概算以上ニ増加シテ一二三、
五三五、一七四円（七月概計）トナリシニモ関セス當初ノ経運ヲ営
ナミシ後未タ数年ナラサルニ遠ク歳入カ歳出ヲ充タス

ニ已ニ之ヲ示スニ至レリトス一ハ是レ財政上信用ヲ振ハシム
ルモノヽ如クニ見ユルト雖モ詳ニ其ノ事実ヲ看察スルト
キハ未タ必ラスシモ然ラサルナリ蓋シ茲ニ歳入ノ予定ヨリモ
其ノ実歳出ノ増加シタルモノヽミニシテ而カモ其ノ歳出ノ増加
シ要スルモノハ昨年十二月松方伯カ議会ニ提出シタル案
ニヨレハ

其ノ重ナル諸経費増加 一三、七一七、五一九円
陸海軍及鉄道拡張費 四、四六七、四一三
（明治二十二年度ヨリ） 五、二五六、六三六）
徴税費増加 一、七二、九七六
特別地価修正費 九〇七、四三三
（明治二十二年度ヨリ） 〇〇）
（明治二十二年度ヨリ歳費至三十年 約三五五、四〇九）
合計 一九、二六五、三四〇
（明治二十三年度ヨリ 二二、七〇二、五四〇）
本年五月廿九日松方伯カ議会ニ提出セシ案ニヨレハ
行政経費増加 一一、二四〇、〇二〇円

就海陸軍及艦艇擴張費	四、八七六、一五四
臺灣経営費年々増加見込	七、〇〇〇、〇〇〇
造幣費已往十年	三、五五五、四〇九
罹災救助基金	五〇〇、〇〇〇
物價騰貴ニ依ル経費増加	六、八六九、五九七
恩給年金増加	四六九、八〇〇
改正条約実施ニ要スル費用	二、五〇〇、〇〇〇
合計	三七、〇一〇、九八〇

ニシテ其ノ臺灣ニ関スル諸経費増加ハ廿九年度ニ於テハ其歳入ノ状況ハ明白ナラサリシヲ以テ其経理ハ之ヲ後日ニ議ヲ為スモノ其他ノ事項ハ皆其後ニ起リタルモノニ係リ又ハ経理ニ属スヘキモノナルヲ以テ之ヲ歳入歳出ニ計上スル歳入不足ト同額ノ歳入ヲ得サルヤ論ヲ待タス而シテ其常ニ増加経費ノ為ニ適当ノ歳入ハ自然ノ増加ヲ以テ之ヲ充タスコトヲ得シモ其餘ハ之ヲ新財源ヲ求メサルコトヲ得ス於右ノ内ハ地租及酒税ノ改正ニ因リテ二一、二六一、四九四円ノ収入ヲ得ルコトセシモ昨年十二月ノ議会ハ内閣ト衝突ノ為メ

短期間ニ解散セラレ井上伯ハ地租酒税及所得税ノ
改正ト電信及鉄道ノ収入増加トニヨリ三五、二八九、八七三円ノ
増収ヲ期セシカ本年五月ノ議会ハ其実行ヲ不可ト
セシモノアリシモ去ル三十二年度ノ豫算ヲ見ルニ之ヲ議
スルハ早計ナリトシテ否決セシカ故ニ今日尚歳入不足ノ
状ヲ見ルナリト、アリシモノナリ

現今ノ大隈内閣ニ於テ松田大蔵大臣カ如何ナル決
定ヲ為スヤハ未タ公ニセラレスト雖モ松方伯及井上伯カ
必要ト認メシ経費ハ大部分ハ何人カ見ルモ其ノ必要ア
存スルモノナレハ松田現大蔵大臣モ何レカノ税ニ向テ必
要ノ増収ヲ求メサルコトヲ得サルヘシ且ツ伝聞スル所ニ
依レハ現大蔵大臣ハ不生産的経費ノ増加ヲ抑制シ
以テ歳出ノ濫増ヲ防止スルト同時ニ有益必要ナル事

業者ノ主要ナル生産ニ関係ナキ物品ノ消費税ヲ
以テスルノ意見ヲ抱クト云フ而シテ現時日本一般ノ輿
論ニヨレハ或ハ酒税及煙草ノ専売ヨリシテ三千万円以
上ノ増収入ヲ得ルハ甚シキ難事ニアラサルモノヽ如シ果
シテ然ラハ此ノ歳入ノ補填ハ増税経過ノ次ノ議会ニ於
テ必ス可決セラルヘク而シテ日本財政上ノ困難タル歳
入ノ不足ハ直ニ消滅シ去ル一年ナリ
然レトモ或ハ今日ニ於テ日本政府カ三千万円以上ノ増税ヲ
決行スルハ其ノ所謂沈滞セル経済ノ状況ニ於テハ
余リ多キノ負擔ヲ人民ニ負ハシメ其ノ財政ノ基礎
ヲ弱クスルモノニアラサルカト疑フモノアルヘシ然レトモ是レ[illegible]ニハ
一片ノ杞憂タルニ過キサルヘシ維新以来日本政府ノ財
政史上ノ確定セル原則ニ従ヒテ[illegible]費其他ノ経常

ノ歳出ハ常ニ経常ノ歳入ヲ以テ支弁スルノ途ヲ取リ来リシ所ト雖モ亦タ然ルヘキカ故ニ其経常ノ歳入ヲ以テ国民ノ負担ヲ測ルニ明治三十年度ノ経常歳入一二三、五三五、一七四円ニ更ニ増税額ヲ三千五百万円ト仮定シテ之ヲ加算スルトキハ一五八、五三五、一七四円トナル之ヲ最近ノ調査ニ係ル人口四二、二七〇、六二〇ニ配賦スルトキハ一人ニ付三円七十五銭ノ負担ナリ然ルニ今ヨリ十年以前明治二十年度ノ経常歳入ヲ見ルニ其数八八、八三六、八三円ニシテ之ヲ当時ノ人口四〇、〇七二、〇二〇ニ配賦スルトキハ一人ノ負担ハ二円二十銭ナリ彼ト此ト相比較スルトキハ一見経常ノ負担ノ増加セシヲ見ルト雖モ銀ノ下落及昨年十月ニ於テ貨幣制度ノ改正アリタル事実ハ忘ルヘカラス明治二十二年ニ於テ日本ハ尚銀貨国ニシテ其当時金銀ノ比価ハ一金

一ニ対シテ銀二十二錢餘ノ割合ナリシ其後銀ハ次第ニ下落シテ新貨幣制度ニ於テハ金一銀三十二錢ノ割合ニ於テ銀一圓ヲ金一圓ニ換算シテ實施セラレタリ故ニ明治二十三年ニ於ケル一圓ハ今日ノ一圓四十七錢餘ニ相當スルカ故ニ二圓四錢ノ負担トイフモ今日ノ貨幣ヲ以テ換算スルトキハ二圓九十五錢餘ニ相當ス然レハ増税ニヨリテ至

民ノ負担ノ増加スルコトアリトモ十年前ニ比シテ僅ニ多額額八十錢ノ増加ニ過キサルナリ日本カ過去十年間ニ於テ著シキ發展進歩ヲ為シタルコトハ余輩カ前ニ述ヘタルカ如シトスレハ十年前ニ比シテ僅ニ八十錢ノ負担ヲ加フルコトアリトモ日本國民カ其ノ負担ノ重キニ苦シムカ如キコトハ斷シテ之アルヘカラス余輩ハ増税ニヨリテ日本ノ財政カ愈堅固ナル基礎ノ上ニ立ツニ至ルヘキヲ信ス

然レ氏日本ノ経済カ現今若干ノ困難ノ状態ニアルヲ以テ其ノ将来ニツキ危惧ノ念ヲ抱クモノハ又上ノ論説ニツキ多少ノ疑ヲ存スルナルヘシ此等ノ人ニ対シテハ次ニ説ク如キ日本経済上ノ困難トイフモノモ亦タ一時ノモノナルコトヲ明ニスルトキハ其ノ疑ハ従ヒテ自ラ消滅スヘキナリ

日本ノ経済カ目今困難ノ状態ニアリト称セラルルモノハ要スルニ金融逼迫輸入超過ノ現状ニアルニヨルナルヘシ然レ氏此事ハ何レモ今ニテヤ特ニ其ノ平常ニ復スヘキコトニシテ一時ノ現象ニアルナリ

現今ノ日本ノ金融逼迫カ如何ナル状態ニアルカヲ述フルニハ明治二十八年以後ニ於ケル物価ノ急激ナル騰貴ト新タル企業ノ経画ノ勃興ニツキ先ツ言ハサルヘカラス

銀價ノ下落ハ明治二十六年以降ノ急激ナル下落
當時銀貨國タリシ日本ノ経済ニ其影響ヲ及ホシ
明治二十年一月ニ於ケル主要品ノ平均價格一〇〇ニ対シテ
明治二十八年ノ平均物價ハ實ニ平均一三五ニ騰貴シタリ
然ルニ二十七八年ニ於ケル日清戦争ノ結果ハ下級社會ニ
巨額ノ金銭ヲ散布シタルコトヽナリタルヲ以テ一時甚シク其ノ

購買力ヲ加ヘタルコトハ銀價下落ノ影響以外ニ又タ
物價騰貴ノ原因ヲ為シ廿九年ニハ平均一四五トナリ三十年
ニハ平均一六一トナリ同年之末ニ於テハ一七二ニ騰貴セル
ヲ見ルニ至レリ此ノ物價ノ騰貴ハ一方ニ資本家ノ企
業心ヲ鼓舞シタルニ相違ナキモ他方ニハ物價騰貴
ソノモノ及其ノ結果タル賃銀ノ騰貴ハ從来ヨリモ多
額ノ資本ヲ運轉スルノ必要ヲ生セシメ之ニ資金ノ需

要ヲ加ヘニシヤ明ナリ
翻リテ既往ノ日本経済社会ノ状態ヲ見ルニ明治二十八年五月日清戦争カ日本ノ勝利ニ終リタル上ニアリテハ日本ノ経済ハ戦争ノ為メ賠償弐千万円内地公債ノ募集アリタルニ関シテ依然タル進歩ノ状況ヲ示シ日本銀行ノ割引利率ハ久シキ以前ヨリ二銭ヲ超過シタルコトナカリシニ関シテ各種ノ事業ノ利益ハ其間ニアリテ甚タ少ナカラス例ハ公立(日本ハ正金及其他)銀行ハ平均一割九分(二十八年ヨリ三十八年ニ至ル十年平均)私立銀行ハ平均一割五分(廿六、七年ニ至ル十年平均)鉄道会社ハ平均八分(二十七年ヨリ三十六年ニ至ル十年平均)ノ純益ヲ得著名ナル汽船会社ハ平均一割余(上同)ノ配当ヲ為ストイフカ如キ有様ナリシニテ戦勝後ノ免レ難キ企業心ニ促カサレ何事カ為サントト焦シツヽアリシ日

本國民ハ翕然トシテ新事業ヲ起サントシテ會社ノ
設立ニ向ヒテ走リ而シテ同年中ニ註冊セラレタル諸會
社ノ發行資本額及從來ノ會社ノ增資額ハ三三九、八四〇、
二九〇圓ニ達シ明治二十九年ニ於テハ更ニ九三九、五五〇
九五〇〇圓ノ巨額ヲ見ルニ至リ直ニ此ノ如キ巨額資
本ノ需要ヲ充タサントスルハ多少ノ困難ヲ感セサルヲ

得ス加之明治二十九年以降後ニ述フルカ如キ巨額ノ
輸入超過及其一因タリシ米ノ不作アリタルヨリ明治三十
年ニ入リテ即チ金融緊縮ノ狀態ヲ現ハシ來リ日本
銀行ハ次第ニ其ノ割引利率ヲ高メ昨年中ニ二錢
五厘ヨリ高メ本年三月ニ至リテ遂ニ二錢七厘ニ高メ
テ今日ニ至レリ要スルニ日本カ現時陷リタル金融上ノ
困難ハ其原因ヲ急激ナル物價ノ騰貴ト急激ナル

新事業ヲ起サントスル傾向及ビ後ニ説明スル巨額輸
入超過ニ存スルモノト云ハサル可カラス
然リ而シテ物價ニ付キテ之ヲ見ルニ主要品ノ平均價格
ハ本年四月ニ於テ廿年一月ノ一〇〇ニ對シテ一七九ニ騰貴
セルカ之ヲ頂上トナシ五月ニ入リテ一七七トナリ六月ニ一七四
トナリ七月ニハ一六八トナリ次第ニ物價下落ノ状況ヲ呈

シ来リ前ニ云ヒシ如ク日本近時ノ物價騰貴ハ銀ノ
下落ニ因リシト同時ニ戰爭ニ因リテ下級人民ノ手ニ巨額
ノ金錢ノ散布セラレシ為メ一時其ノ購買力ヲ増加シタ
ルトニ因ルモノニシテ今ヤ其物價カ漸次下落セントスル
傾向ヲ現ハシ来リシハ即チ戰爭ニ因リテ変セラレシ経
済上ノ秩序カ常態ニ復シ来ルヲ示スモノニシテ決シテ
過多生産ノ事實アリタルニアラサルナリ從ヒテ此ヨリ

物價ハ其正當ナル程度マテ下落シテ而シテ勞働者ノ賃銀モ亦タ其ノ正當ナル度マテ下落シテ斯ノ如クニシテ資金需要ノ増加ト不正當ナル一時ノ物價騰貴ニヨリテ生シタル部分カ安セサルニ至ルハ蓋シ遠キニアラサルナリ

新事業カ目的トセル會社ノ設立及擴張ニ付キテハ明治三十年ニ於テ既ニ明治二十九年ニ於ケルカ如キ熱勢ナク有セス同年全一ケ年間ニ於ケル新設會社ノ資本額及旧年ノ會社ノ擴張資額ハ一八四、九三一、〇〇〇円ニ止リ三月末日ニテハ三〇、六一五、〇〇〇円アリシノミ而カモ其ノ多クハ無稽ニ法律ニヨリテ組織スル農工銀行ニ属セリ是ニヨリテ観ルニ一時日本國民カ新事業ノ經營ニ走ル傾向ハ最早其ノ平常ニ復シタルモノニシ

テ其ノ明治三十年以後今日ニテモ金融逼迫ヲ感ジツヽアルモノハ明治二十九年及三十年初頭ニ於ケル事業経営ノ結果タルニ過ギズ然カモ此等ノ経営セラレタル会社ノ設立及増資ハ其ノ成立シ得タルモノハ今日既ニ成立シテ其事業ヲ始メ其ノ然ラザルモノハ多クハ之ヲ見合セタルガ故ニ今後社会ヨリ感ズル一時ノ資

金ノ需要ハ次第ニ平常ニ復スルノ方向ニ赴キツヽアルモノト云ハザルベカラズ現ニ東京諸銀行ニ於ケル近次ノ状況ヲ見ルニ左ノ如シ

	三十年十二月末日	三十一年三月末日	三十一年六月末日	三十一年七月末日
預金	六三、〇三五、六五七円	六四、三一〇、七〇三円	六六、四七五、八〇五円	六七、三五九、〇四五円
貸金	五三、八六〇、七三七	五五、七二〇、七一七	五五、三一一、四四九	五三、一四六、〇七一
割引	三〇、四四九、〇五六	三一、五七五、三九二	三〇、八四四、六七二	三二、二七七、三八五
金銀在高	七、五九〇、八〇一	五、八三五、五四五	七、九八九、八六七	六、七一八、一九九

右ノ表ニ見ユル如ク預金ガ比較的ニ又タ絶対的ニ増加

ニアリテハ金融逼迫ノ衝次甚タシカ後ヲ来リテ経済社会
ノ回復ニ近キツヽアルコトノ兆候トシテ見ルヘキモノナリ
ト信ス
然ルニ輸入超過ノ状勢ハ果シテ如何今明治二十八年
ヨリ昨三十年ニ至ル輸出入ノ状况ヲ見ルニ左ノ如シ

	輸出	輸入	合計	輸出入超過
明治二十八年	一三六、一一二、一七七円	一二九、二六一、五五八円	二六五、三七三、七三五円	六、八五一、九九九円
明治二十九年	一一七、八四二、七六〇	一七一、六七四、四七四	二八九、五一七、二三四	五三、八三一、七一四
明治三十年	一六三、一三五、〇七七	二一九、三〇〇、七七一	三八二、四三五、八四八	五六、一六五、六九四

近年ノ輸入超過ハ明治二十九年ニ始マリタルモノナリ是其端ヨ
リ始マリタル所ノ物價ノ急激ニ金銀比價變動ニ
騰貴セシコトカ其一原因タリシコトハ疑フヘクモアラサル所ニ
亦特殊ノ事情ノ存スルアリシナリ即チ明治二十九年ニ於
テハ日本ノ輸出貿易ノ大得意先タル米國ニ於テ経済

上ノ困難アリシカ為メ生糸絹布類及茶等ノ輸出貿易ハ
大ニ阻害セラレタルノミナラス内地紡績業ノ進歩及諸般
ノ事業勃興ノ勢ハ鉄類及機械其ノ他原料品ニモ
棉花ノ輸入ノ増加シタルニ又下等社会ノ購買力ノ増
加ハ著シク各種ノ消費品ノ輸入ヲ加ヘタリ明治三十年ニ
入リテハ輸出貿易ハ米國経済ノ回復ト共ニ其状況回復シ

併セテ東洋各地ノ綿糸石炭等ノ輸出ヲ加ヘ多額ニ上リテ
著シキ増加アリタリト雖モ廿九年秋ニ於ケル米ノ不作ハ卅
年ニ比シテ八分ノ四足ノ収穫ヲ見タルカ為メ莫大ノ米ノ輸入アリ
タルニ加ヘテ各種消費品ハ随テ其輸入ヲ増シタルニ関セス
鉄類及機械其ノ他棉花ノ輸入増加アリタル後ニ猶ホ
巨額ノ輸入超過ヲ見タリ然ルニ不幸ニシテ昨年ハ明治
三十年ノ秋ニ於テ再ヒ一層甚シキ米ノ不作ニ逢ヒ其ハ

収穫ハ平年ニ比シテ寧ロ一割六分八厘七毛ノ減少ヲ呈シタルカ為メ本年初ヨリ七月ニ至ル迄ノ輸入超過ハ四三、四五六、七七七円ノ多キニ上リ其他鉄類及機械ノ輸入サルヽモノ尠少ナカラサルニ又来十月ヨリ新税目ノ実施サルヽコトノ豫想ニ基キテ各種貨物ノ輸入ハ甚シク急カレタルカ為ニテ本年輸出ノ状況ハ前年ト大差ナキニ関ラス

七ヶ月間ニ九四、八八五、五八五円ノ輸入超過ヲ示シタリ其ノ状況左ノ如シ

	輸出 円	輸入 円	合計 円	輸入超過 円
一月	一〇、九一六、三三〇	一八、八七一、一五五	二九、七八七、四八五	七、九五四、八二五
二月	一一、四四七、二四七	二〇、五三六、二二七	三一、九八三、四七四	九、〇八八、九八〇
三月	一〇、九四七、五三二	二五、八〇九、七五一	三六、七五七、二八三	一四、八六二、二一九
四月	一〇、六六五、八五〇	三〇、〇八五、五九三	四〇、七五一、四四三	一九、四一九、七四三
五月	一二、六四七、三〇一	三〇、二五九、六一五	四二、九〇六、九一六	一七、六一二、三一四
六月	一三、〇八三、六一六	二九、一九五、五一六	四二、二七九、一三二	一六、一一一、九〇〇
七月	一二、四八二、九四三	二二、三一四、五一七	三四、七九七、四六〇	九、八三一、五七四
計	八二、一八八、七八九	一七七、〇七二、三七四	二五九、二六三、一九三	九四、八八五、五八五

右表ニ示スカ如ク輸入超過ハ本年四月ニ於テ其ノ頂上ニ達シ五月ヨリ漸次ニ退歩ノ傾向ヲ取リ遂ニ七月ニ至リ其ノ著シクナリシカ斯ノ状ノ傾向ノ将来ニ継続スヘキコトハ全然疑ハナキ所ナリ

既ニ述ヘタルカ如ク日本ニ於ケル新事業熱ハ最早平常ニ復シタルカ故ニ今後殊ニ鉄類及機械等ノ輸入モ亦タ平常ノ度合ニテ減却スヘキハ疑ヲ容レサルヘシ加フルニ本年ニ於テハ麦ハ数十年来未タ嘗テ見サル所ノ豊作ナルノミナラス今日ニテハ天候ノ模様ニヨレハ秋期ニ於ケル米ノ収穫モ非常ノ好景況ナルヘキコトハ各人ノ豫想スル所ナレハ今日既ニ多少ノ輸入ヲ見ントスル米カ其後引ツヽキ多ク輸入サルヽコトアルヘシトハ考フルコト能ハサルナリ且新税目実施ノ日モ接近シタルコト

ナレハ之ヲ見越シテノ輸入ハ其実施ト共ニ中止セルヘ
キノミナラス却リテ今日輸入過トナレル貨物ニシテ其後輸
入ノ非常ニ減却セシ年ハ一見明白ナル事ナリ加之日本内
地ノ物価モ漸次下落ニ赴キツヽアリ況シテ通常
ノ年ニ於テモ輸出超過ナリシ十九年下半季ニ向ヒ来レル
ヲヤ此ノ如キハ畢竟スルニ今日既ニ生シ来レル輸入超

過ノ減少ノ勢力ヲ助成スルモノニシテ近キ将来ニ於テ日本
ノ輸出入カ其常態ニ復スヘキハ最早疑ヲ容ルヽノ餘
地ナカルヘキナリ
此ノ如ク観察シ来レハ日本ノ経済上ノ困難ノ本因ハ
既ニ去レルモノトイフヘシ従ヒテ企業ハ日本ノ経済カ其
平常ニ復スルノ近キニアルコトヲ断言セサルコトヲ得サル
ナリ企業カ平常ニ復ストイフハ其ノ進歩ノ常態ニ

損スルコト或ハ蓋シ之カ為メニ困難ノ沿襲ト共ニ日
本ノ経済上ノ進歩モ再タ停止スル如キ事アルモノア
ラハ是レ誤解ナリトス殊ニ一ケ年ノ日本ノ経済カ去年
ニ来困難ノ状況ニアリトスルモ試ニ二三ノ事物ニ就テ
本年六月末ノ現状ヲ以テ昨年歳首ノ状況ニ比較スレ
ハ二六、四三一哩ノ鉄道ハ三、〇二八哩トナリ其ノ機関車ノ数六

一三輛ハ八二四輛トナリ貨車客車ノ数一二、一七〇輛ハ
一四、〇六八輛トナリ汽船ノ総噸数三六三、二三三噸ハ四三七、
四一三噸西洋形帆船ノ総噸数二七、四一二噸ハ六五、三六四
噸トナリ各種ノ株式会社及銀行ノ資本金ハ六六九、
三五六、八八一円ヨリ九二〇、四四三、三三九円トナルカ如キ事
実アルカアルトキハ日本ハ所謂経済上ノ困難ニ際会セ
リトスルモ其実目前若干ノ金融ノ弊端ニ遇ヒタ

ルカ為メ之ニヨリテ苦痛ヲ感スルモノハ叫聲ヲ立ツルニ
甚キニ過キス。而シテ其ノ經濟上ノ進歩ハ多少鈍リタル
モノアリトスルモ未タ嘗テ其ノ歩ヲ停メサルコトハ無シ
况ンヤ此ニ經濟上ノ困難ノ生スルト同時ニ近年ノ輸入
超過ノ一原因タリシ戰争ノ機械カ工場ニ据付ケラレ
テ是ヨリ将ニ其ノ運轉ヲ開始セントスルニ於テオヤ、

要スルニ何レノ事ト雖モ其ノ生長ノ際ハ資本ノ需要
供給ニ超過スルノ現象ヲ呈スルハ免レサル所ニシテ日
本ノ如キ急速ノ進歩ヲ為シタルモノニ於テ其ノ甚キアル
怪ムニ足ラサルノミナラス之ニ加フルニ二十七八年ノ役ノ如キ勝
利ヲ以テ終リタル戰争後ニ其ノ經濟財政ノ上ニ
一種ノ衰微ヲ生スルコト亦タ歴史上其ノ例少ナカラサ
ルナリ日本ノ現状ハ日本ニ特有ナルモノニモアラス又タ

回復シ難キ性質ノモノニモアラス今ヤ一時ノ変象ハ経済上ノ自然ノ作用ト政府及人民ノ自重自制ニヨリテ其平常ノ状態ニ復帰スルニ於テハ日本ノ経済及之ヲ根拠ト為スル財政カ其ノ本来ノ進歩ノ大勢ニ乗シテ直行スルコトハ余輩カ疑ハント欲スルモ得サル所ナリ